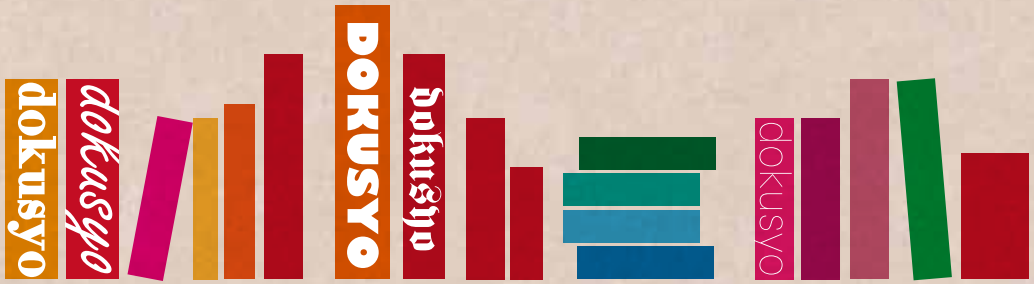
読書カフェ

私のとっておきの一冊



vol.
3

2011年10月26日発行
発行・大学生協 京滋・奈良ブロック
〒606-8106 京都市左京区高野玉岡町23-3　TEL：075-712-1156

読書カフェは、どこか「濃密」ですが…

むかし若かったときお金はなかったけれども時間はたっぷりあって、今のように大学の中にそんなに居場所もなかった頃、街の喫茶店・カフェや生協の学食は読書室でした。何か一冊を独りで、また時には友人たちと同じ本を読み合ったりしていたものです。ついこの前までのごく普通の大学生の姿だったと思いますし、もしかしたら今でも同じかもしれません。でも、このごろは本を読むということがどこか「希薄」な、重大な意味を持たない行為になっているような気もします。

そんな風に感じる大人で、生協に関わる教職員がこの「読書カフェ」をはじめました。これまで、固いものからちょっと柔らかいものまで、大人たちにとってどこかコーヒーのように「濃厚」な香りを放つ本が取り上げられています。その記録を集めたこの小冊子も三冊目になりましたが、これからも続きます。ともに一冊の本に触れることの喜びと「濃密さ」を共有できる機会であり続けたいと願っています。「うざい」と感じるかもしれませんが、若い人々にとってはきっと新鮮な経験の場となるに違いありません。どうぞ、この記録をのぞいて、実際に足を向けてみてください。

第８回

読書カフェ

私にとっての『野生の思考』

黒田末寿
滋賀県立大学人間文化学部 教授

■ この本に出会ったころ

『野生の思考』は、この間亡くなった社会人類学者、クロード・レヴィ＝ストロースの著書です。洗練された概念による自然科学的思考に対し、自然の多様な要素と経験によって現象を具体的に説明する「野生の思考」、その方法としてのブリコラージュ（器用仕事と訳されています）という概念の提起、そしてサルトルの思想に潜む西欧文化中心主義批判で知られていますが、私にとって、人類学の可能性と研究の意義を見つけることができた思い出深い一冊です。

この本の和訳がでた１９７０年春は、私が最初のアフリカでの類人猿調査から帰った半年後で、そこでの経験をどう考えたらよいのか悩んでいたときです。皆さんも自分が選んだ研究とか学問が世の中の役に立つのかどうか考えたことがあると思うのですが、私が学生だった１９６０年代後半から70年代はとりわけそういう議論が盛んでした。当時は、核戦争の脅威が現実のものとしてあった冷戦体制のさなかで、ベトナム戦争があり、日本ではさまざまな公害や環境問題が生じていました。私は霊長類社会学が専門ですが、関連する人類学の分野では調査する側と調査される側の非対称な関係が新植民地主義として問題化されていました。そういうことで、学問や研究者の社会的責任について考えざるを得ない時代だったのです。

私はその答えを見つけられず、いったんは高校に就職したのですが、結局、研究への気持ちが止まず、京都大学の大学院生になってアフリカで霊長類社会と人類社会の研究をされていた伊谷純一郎先生に師事しました。幸運にも修士２回生で、加納隆至先生のピグミーチンパンジー（またはボノボと呼ばれる類人猿）調査隊員として１年間ザイール（現コンゴ民主共和国）で調査できましたが、「歩く熱帯病陳列棚」と言われるほど病気を抱え込み、帰国すると長崎大学病院の重症患者棟に送られました。そこでは同じ病室の患者がつぎつぎ亡くなってゆくなかで、私だけが回復していくわけです。調査地の村でも同じように肺炎や結核がはやって多くの村人が死んでいったのを思い出し、身にこたえました。私が薬をあげた人は治るのですが、薬は足りません。私は病気になっても日本に帰って治してもら

えますが、村人にはそういう金も手段もない。伝統的な薬草の知識は残っているものの、長い植民地時代と独立後の混乱で適切な治療ができる人はいなくなっていました。

■ 人類学の可能性

入院中に出した結論は、調査地の村人がおかれた状況の改善には、私たちがやれることを精一杯やっていくしかない、できるだけ村人が主体になる方法をさがそうでした（現在は後輩たちの尽力で診療所ができ、何人もの村人が奨学金制度で　医学を学んでいます。村人にも自分たちで類人猿の保護区を運営する動きが起こっています）。しかし、研究そのものの役割については、『野生の思考』を読むまで見えて来なかったのです。

私は、類人猿を追うとき二人の村人に助けてもらっていました。彼らは、私がすぐ迷う森を自在に動き、かすかな痕跡から動物の行動を推測し見つけます。数百種の植物を即座に識別し用途を言い、見慣れない種は形態・臭い・樹液・生えている場所などから既知の種に関連づけて、オトコ何々、オンナ何々、ミズ（水）何々などと分類するのです。後で確かめると、それは研究者が野外で行う植物の見分け方と植物学の分類にきれいに対応していました。私は彼らに学ぶことで、彼らが動物と植物の生態を熟知し、さまざまな種を生態的・形態的に関連づけ構造化した方法をもっていることがわかったのです。こうした知の形式は太鼓による遠距離通信や農法などにも見つけることができました。

この意味づけが『野生の思考』に書いてあったのです。「先進国」の人々は長い間、「未開社会」の人々は「子ども段階に対応する幼稚な思考」に囚われ、野蛮な状態にあると考えてきました。これに対し、レヴィ＝ストロースは、経験と自然の多様な要素をもちいて感覚的かつ具体的に現象を説明する思考様式＝野生の思考が、論理的構造をもち実践的な認識であることを明らかにして、それまでの人類学者の解釈にこそ破綻があったことを示しています。それのみか、野生の思考は現代産業社会に暮らす私たちの生活でも普遍的かつ重要な働きをしていることを指摘しています。すると、「未開社会」の人々を幼稚、野蛮というのは、無知で裸の王様のような自分自身のことがわからない自文化中心主義にほかならないといえます。

この本は、西欧文化中心主義を見事に解体しています。そして私に、人間の思考様式の多様性と研究のおもしろさ、そういうことができるのはまれだとしても、たしかに学問には人々の認識を一変させ世界を変える可能性があると教えてくれたのです。その後、私はだいぶ自由になった気がします。

『野生の思考』クロード・レヴィ・ストロース著
1976年3月　みすず書房

＊その先の読書のために

レヴィ＝ストロースの著作にはどれも人類学の興味深い事例がたくさん載っているので、それを読むだけでも社会人類学・文化人類学のおもしろさを知ってもらえると思います。難解という評判がありますが、全部わかろうとする必要はありません。さしあたっては、『悲しき熱帯』、『構造人類学』が読みやすいでしょう。解説書としては、『レヴィ＝ストロース：入門のために　神話の彼方へ』が比較的簡単です。レヴィ＝ストロースの構造概念と思想全体については、渡辺公三さんの『闘うレヴィ＝ストロース』がお薦めです。

黒田末寿［滋賀県立大学人間文化学部 教授］

1947年、岡山県生まれ。「ぼくは君のような鈍才が好きだ」と数学の教授に言われ、ゼミに誘ってくれたほめ言葉ともわからず、大学院をあきらめて就職。2年後、アフリカで人類学をやりたくなり、京都大学の自然人類学研究室に進学したが、当時、人類学が植民地支配の道具になってきたと批判され始め、まだ、ナイーブな田舎者だった私は、興味がなかったサルの研究に転向してしまった。しかし、おかげで修士2回生でアフリカで類人猿を1年間調査できた。むろん、留年。おまけに帰国すると熱帯病の歩く陳列棚とよばれ、すぐに入院。けれど、もともと人より遅れているからどうってことはなく、このころから霊長類学に打ち込めるようになった。最初の調査を本にして読売文学賞をもらったとき、一言が人生の路線を切り替える不思議さを思った。やってみないとわからないがモットーで、1994年から滋賀県立大で働き始めてから、焼畑や鍛冶もやっている。

第９回

読書カフェ

『プラネタリウムを作りました』（改訂版）

―７畳間で生まれた４１０万個の星、そしてその後―

近藤文良
滋賀大学教育学部　教授

■ 一人で世界一のプラネタリウムを作った男の物語

たった一人でレンズ投影式のプラネタリウムを自作した人間の物語です。ギネスにも記録される投影星数２２００万個。今では日本科学未来館をはじめ世界各地に常設されるほど圧倒的な性能を誇りますが、人間が悪戦苦闘しながら、物作りに取り組む姿から私たちが学ぶことのできる意味は大きいと思います。

日本の子どもをめぐる大きな教育目標は「自ら学ぶ力」の形成といえるでしょう。「自ら学ぶ力」とはどのような力なのか、その背景的な要因は何なのかは、教師をめざす人々はもちろんですが、これからの時代を切り開く大学生諸氏にとっても考えるに値すると思います。私は「学びの心理学」を研究していますので、皆さんとともに人間がエキスパートとして成長する原動力は何かをこの本から考えたいと思います。

ごく簡単に、大平貴之さんの物語を紹介しよう。彼は小学校３年の時、画用紙に夜光塗料を塗って、壁に貼ったら北斗七星がくっきり浮かび上がったそうだ。「それが全ての始まりだった」という。それ以来プラネタリウム作りに没頭するのですが、特に圧巻なのは大学の４年間をかけて挑んできたレンズ式プラネタリウムです。電源回路の製作、レンズ光学系の設計、それにプラネタリウムの心臓部分として恒星原板に0.013mm の穴を数万個空けるという最大の難問を乗りこえたところです。大学院進学、就職後も、オーストラリアで見た雲海のような天の川をプラネタリウムで再現したいという模索は続き、スーパーマイクロプロッターというものを開発。これは青色レーザーで１/１000mm の穴を数百万個（現在ではなんと２２００万個）恒星原板に空けるという気が遠くなるほどの技術です。

■ 大平さんの偉業の背景とは

この偉業を成し遂げた大平さんのおいたちを心理学的に眺めてみよう。彼の力の源泉はなんといっても**「知的好奇心」**だろう。どうなるかわからないとき、自分の知っていることと目の前で起こっている出来事が整合しないとき、人間はそれがどうなるのか、なぜそうなるのか、を確かめようとする。彼の場合は知的なレベルでなるほどよくわかったというのではなく、体験的認知といって自分で実際に何かやってみてどうしてそうなるかを確認したくなるように育っていると感じます。このような体験的認知を通じて、知識を生み出す、概念を生み出すための知識、すなわちどうすればある概念が生み出されるのかについての方法的な側面に関する知識を獲得していったように思います。

２つめは強い**「自己決定感情」**でしょう。ただ面白いから自分だけがのめり込んでやるということではなく、いろいろなハンディがあっても自分で計画を立て、あえて不得意な分野に挑んでいく姿は自己決定の典型でしょう。自己決定とはただ自分が好きなことをやればいいということではなく、その過程や結果に関する責任感に裏付けられているものということが、彼の記述のなかでよく伝わってきます。

３つめに、彼自身の自律的な学びを支えてきたものはといえば、**「自己効力感（自分はこういうことができるだろうという見通し）」**でしょうね。難しい課題に取り組むときでも、過去に自分の達成経験があれば、こうすればうまくいくだろうということが予想されるし、簡単にはうまくいかないことがあっても、努力を持続させることもできます。彼を支えてきたのは、俺にできないはずはない、過去もそうだったのだからということだと思います。実際、彼自身の信条は「人間は可能は証明できるが、不可能は証明できない」（ホームページより）だそうです。

自己効力感が高ければ自分で、自分の学習をうまく進めるために様々なやり方を適用していくことが、心理学の研究からいろいろ示されています。たとえば、明確な具体的な目標を立て、実行の最中にも絶えず、課題の進行をモニターし、また自分自身の理解の程度などもモニターしながら進めることができます。また自己効力感が高ければ適切な「援助要請（他人に助力を求めること）」ができます。小学校の時からレンズメーカーに電話をしてレンズをくださいとお願いするとか、電源製造会社にアルバイトに入り、山のような質問を浴びせるなどする姿が生き生きと書かれています。お願いされた方は、教えてあげたくなるほど、彼の目が願望に燃えていることを知らされるのではないでしょうか。

４つめに彼の成長に大きな役割を果たすことになるのは、**「人との関係性・絆（きずな）」**です。たとえば川崎市の青少年科学館の若宮さん、隣に引っ越してきたエンジニア、電源メーカーの社長、そして劇団のスタッフなど。さまざまな人たちがその時点で実にタイミング良く登場しています。最近では他ジャンルのアーティストともコラボレーションしています。自分一人の楽しみのためではなく、星空のある環境の中で多くの人の喜びや生き甲斐につながることが明確に意識されるようになって、ますますプラネタリウム性能のアップにつながっているのではないか、とおもわれます。

『プラネタリウムを作りました
―７畳間で生まれた４１０万個の星、そしてその後―』（改訂版）
大平貴之著　２０１０年７月　エクスナレッジ

＊その先の読書のために

大平さんの物語は単なるサクセス・ストーリーとしてではなく、人間にとって最も大切な「自律性」を考える素材になります。偽りのない自分を生きるためには自律的でなければなりません。自律的であることの意味を考えさせてくれる次の本は、自らが行為の主体であることと周囲との折り合いをどのようにつけるか、すなわち「統合的」と呼ばれる心理プロセスの大切さを教えてくれますのでお勧めします。

デシ・フラスト『人を伸ばす力』新曜社　1999年

近藤文良［滋賀大学教育学部 教授］

1948年三重県桑名市の生まれ。京都大学教育学部から同大学院博士課程へ。専門は心理学ですが、子供の頃から工作が大好き。5球スーパー真空管ラジオ作ったことは私の誇り。大学では半田ごてを握って実験装置を自作。パソコンの時代になっても実験プログラムだけでなくワープロ、通信ソフトなど自作でないと気がすまなかった。滋賀大学教育学部教授として教師教育にかかわる専門研究をする傍ら、障害者のコミュニケーションエイド機器を共同制作して受賞。研究は「人間の自律的な動機づけ」を認知心理学から考えること、脳波の指標から認識過程を研究することなど。趣味は木工ロクロ（旋盤）による木地作りと漆塗り。

▲大平氏がプロデュースした家庭用プラネタリウムを会場の天井に投影しました。

第10回

読書カフェ

宮澤賢治を読む

長友恒人
奈良教育大学 学長

「雨ニモマケズ」、「銀河鉄道の夜」、「風の又三郎」、「セロ弾きのゴーシュ」、「どんぐりと山猫」、「注文の多い料理店」、「やまなし」、etc., etc.…宮沢賢治の作品をひとつも読んだことがないという日本人はいないだろう。

私が賢治に出会ったのは、小学校の高学年だが、何年生のときであったかは記憶にない。「やまなし」や「注文の多い料理店」などの短編はおもしろかったが、「銀河鉄道の夜」や「風の又三郎」などはロマンに乏しいリアリストの私にはつかみどころがなかった。印象に残っているひとつは、「オッペルと象」である。「稲扱器械の六台も据えつけた」豪農オッペルに騙され、搾取されていく白象は、「サンタマリア」と祈ることしかしない。それを聞いた月と手紙を林に届けてくれた赤い着物の童子のおかげで、林の象たちが「グララアガア」と叫びながら、白象を救出する。オッペルはくしゃくしゃに潰されるが、勧善懲悪が強調される構図にはなっていない。「ある牛飼ひ」が物語ったことになっているこの話の終わり方は次のようである。

・・・／「ああ、ありがたう。ほんとにぼくは助かったよ。」／白象はさびしくわらってさう云った。／（一行空き）／おや、君、川へ入っちゃいけないったら。／

最後の一行は、いろいろに解釈できるが、敢えて解釈しなくてもいい。「オッペルと象」の場合は、単純なストーリーでありながら、この一行があることによって、余韻を残すことになる。賢治の作品の多くは、パターンは違っても、余韻を残す。その余韻によって、読者の心が賢治と細い糸で繋がれたまま、脳裏に賢治が宿ることになる。

賢治の作品は、「詩」、「物語」、「短歌」でありながら、実は「賢治そのもの」である、という色合いが濃厚であり、強烈である。作品を通してその創作者である宮沢賢治と出会い、語り合い、交感する、賢治の作品はそんな存在である。そのことは、もちろん、賢治が詩人や作家である前に、「実践家」であったことに起因する。作品の多くが生前に本人の意志で発表したものではなく、ノートや手帳に書かれたものであったことにも関係するかもしれない。

中学校の教科書で出会った、「雨ニモマケズ」は人口に膾炙しているという意味で、賢治の代表作である。その解釈はいろいろ

あるが、彼の「実践」（挫折または未完成）抜きには語れないこと、法華経に帰依したことを背景とする理解が最も馴染めるものである。

ところで、賢治が誰にでも愛される秘密はどこにあるのだろうか。賢治は花巻農学校に短期間併設された岩手国民高等学校の重要な日課であった皇国運動（やまとばたらき）を生徒と共に率先して実行したという。大政翼賛会には文化部があり、朗読詩集「常磐樹」を発刊していた。１９４１年12月8日の真珠湾攻撃の翌年、「常磐樹」は、賢治の「雨ニモマケズ」を登場させて、「臣民」の志気を鼓舞した。一方、敗戦後の学校の教室では、教科書を墨で黒塗りさせた後、「教え子を戦場に送ったことを後悔した教師たち」が使った教科書に再び、「雨ニモマケズ」が登場した。この「矛盾」をどう理解すればいいのか。

賢治は法華経の立場に立ち、「丈夫ナカラダ」をもって、「デクノボウ」として、空気のような存在で、皆に意識されない「役立ち」を願ったのであろう。菩薩であれ、修羅であれ、鬼であれ、彼の依って立つこの立場を否定する者はいない。「ジブンヲカンジョウニイレズ」に奉仕する賢治を、好戦論者も平和主義者も、自分に引きつけることで受入れることができる。先に「矛盾」と言ったが、こう考えると「矛盾」はない。宗教的立場の限界であろうか。

賢治の限界は、志をもった後継者がいなかったこともあって、雨ニモマケズの精神と羅須地人協会の実践が継続しなかったことにもあらわれている。私は大学生になって、賢治の足跡を尋ねて岩手県をひとり訪ねた。羅須地人協会からイギリス海岸へ徒歩で向かったあぜ道で、鼻を押さえてしまったあの有機肥料の匂いは何だったのだろう。賢治の土地改良のための農業指導は途絶えてしまった、としか思えなかった。「雨ニモマケズ」の志と実践の現実の乖離に唖然とした、そのときの記憶が鮮明である。

学生時代に、私が宮沢賢治を愛読していることを知った友人のお母様（高校の国語教師）が和紙に「雨ニモマケズ」を墨書して友人に託してくれた。大切にしていたつもりだが、どこかに紛れ込んでしまった。実はその頃、私は「雨ニモマケズ」は眼中になく、「春と修羅第一集」に収められた「蠕蟲舞手アンネリダタンツェーリン」がえらく気に入っていた。そのなかに繰り返し登場する（えぇ、８ｙｅｏｑ／ことにもアラベスクの飾り文字）…子どもの頃に手水鉢の中で見とれたボーフラ（蚊の幼虫）の動きをこれほど写実的に捕らえた描写を他に知らない。

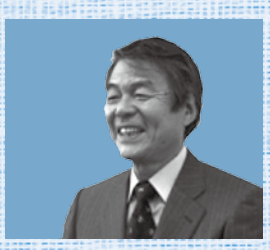
賢治は賢治、私は私…それでも、賢治は、細い糸で繋がれたまま、私の脳裏に宿っている。

（引用などは全て「宮澤賢治全集、筑摩書房、１９５９」による）

＊その先の読書のために

「賢治の作品の読み方」というものはないが、岩手国民高等学校の講義が元になったといわれる、「農民芸術概論」、「農民芸術綱要」、「農民芸術の興隆」を読んでおくことをお薦めする。このほかにも、花巻農学校在職中から羅須地人協会の活動停止後にかけての、「生徒諸君に寄せる」、「稲作挿話」、「和風は河谷いっぱいに吹く」などは、賢治が病気がちになる以前のバイタリティーに満ちた躍動的な作品であり、亡くなる2年前に病床で手帳に記した「雨ニモマケズ」とは対照的で、読んでいて元気づけられる。「永訣の朝」は、「無声慟哭」及び「オホーツク挽歌」のシリーズと合わせて読むと涙が止まらない。

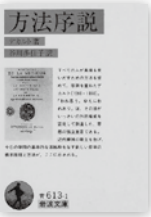
生半可な予備知識をもたずに、作品そのものから感じるものを素直に楽しむのもおもしろいかもしれない。



長友恒人［奈良教育大学 学長］

1943年サハリン（賢治は「サガレン」という）生まれ。小学校入学から高卒までは、北海道と九州で過ごす。「これからは原子力の時代」と、工学部に進学したが、原子核工学に打ち込めず、不勉強の末に物理学に転向。数理には弱かったが、手先の器用さとフレキシブルな発想力に助けられて、なんとか研究者として自立。奈教では、実験設備の貧困に助けられて・・・広島・長崎の原爆投下時の放射線量推定に打ち込み、チェルノブイリ原発事故調査、セミパラチンスク核実験場跡線量調査に参加。40代になってルミネッセンス年代測定をライフワークとすることを決意、それなりの研究はしてきたつもり。賞罰なし。

生協理事長の選んだ学生に薦めるこの一冊



京都大学生協　理事長 川添信介（京都大学大学院文学研究科教授）

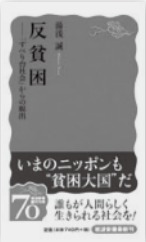
アウグスティヌス著『告白』（服部訳）岩波文庫
デカルト著『方法序説』（谷川訳）岩波文庫

どちらも西洋哲学の大古典であるが、いずれも「自叙伝」のかたちをしていて表面的には読みやすい。アウグスティヌスはキリスト教の神に寄り添いながら、デカルトは何にも頼らずに、しかし両者とも「自分で徹底的に考える」ということの素晴らしい典型となっている。表面的な読みやすさに安住しないで、じっくり読んで欲しい。

同志社生協　理事長 大鉢忠（同志社大学理工学部教授）

賀川豊彦著、野尻武敏監修　復刻版『友愛の政治経済学』
コープ出版

2009 年に 1909 年 12 月 24 日賀川豊彦が神戸・葺合新川のスラムに住み込んだ日を記念した賀川を顕彰する賀川豊彦献身 100 年記念行事が行われた際に復刻されたもので、英語で出版された『Brotherhood Economics』の翻訳本です。生協の消費組合を含めて保険、生産、販売、信用、共済、利用の 7 つの協同組合を提唱した賀川が「大恐慌以降の経済立て直しのためにアメリカ国内で彼の兄弟愛、友愛に基づく協同組合論」について語ったものです。



立命館生協　理事長 山本忠（立命館大学法学部教授）

湯浅誠著『反貧困　「すべり台社会」からの脱出』岩波新書

現在の日本社会は、格差・貧困社会といわれるように、公的な生活保障の仕組みが機能不全に陥ってしまっています。どうしてそのようになってしまったのか、わかりやすく解説してくれますし、さらに、これからの日本社会はどのような方向に進むべきなのか、貴重な示唆を与えてくれる良書です。

立命館生協　副理事長 小沢道紀（立命館大学スポーツ健康科学部准教授）

ドラッカー著『非営利組織の経営』ダイヤモンド社（①）
マンハイム著『イデオロギーとユートピア』中公クラシックス（②）

①組織の運営について，何が重要なのか，ドラッカー特有の概念を用いながら明らかにした本。

②社会がより良く変化していくために，何が必要とされ，どんな状況で生じていくのか，そのことについての一つの見方。

龍谷大学生協　理事長 古川秀夫（龍谷大学国際文化学部教授）

藻谷浩介著「デフレの正体―経済は「人口の波」で動く」　角川書店

大学生活と卒業後の生活を展望する上で、自分たちがどのような社会経済環境の中にあるのかをより明確に提示してくれる。

京都府立医大・府立大学生協　理事長 渡邊能行（京都府立医科大学大学院教授）

湯浅誠著『反貧困「すべり台社会」からの脱出』岩波新書（①）
吉村昭著『白い航跡　上・下』講談社文庫（②）

①平成 20 年末から平成 21 年正月にかけての東京日比谷公園の「年越し派遣村」の村長の任にもあたった湯浅　誠氏の著書で、大佛次郎賞を受賞した書。医療の背景にある社会状況として医学生だけでなく一般大学生としても必読の書籍である。

②慈恵会医科大学の創始者で、元海軍軍医総監の高木兼寛が脚気の原因が細菌ではなく食事にあることを英国留学で得た知識をもとに突き止め、海軍兵士の食事に介入することによってその予防に貢献したことについての小説。この根底には医学の基礎をなす英国発の疫学の考え方があるので医学生だけでなく一般大学生にも読んで欲しい書籍である。

京都橘学園生協　理事長 阪本崇（京都橘大学現代ビジネス学部准教授）

伊東光晴著『君たちの生きる社会』ちくま文庫

大学生が学ぶべきことのひとつに、ものごとを多様な角度から見ることができるようになるということがあります。本書は、身近な現象を題材に、ものごとをひとつの視点からではなく、多角的に見ることの重要性を教えてくれます。1960 年代に書かれた中学生向けの本と言うこともあり、話題がやや古い点や、子どもに話しかけるような文体がやや気になるかもしれませんが、いま大学生が読んでも十分に面白く、ためになる本だと思います。

menu

第8回

私にとっての『野生の思考』

語り手 … 黒田末寿 [滋賀県立大学人間文化学部 教授]

- 日　時：2010年10月28日（木）18：00〜20：00頃
- 会　場：滋賀県立大学　看護食堂「ナシェリア」

第9回

プラネタリウムを作りました』（改訂版）
—7畳間で生まれた410万個の星、そしてその後—

語り手 … 近藤文良 [滋賀大学教育学部 教授]

- 日　時：2011年1月18日（火）18：00〜20：00頃
- 会　場：滋賀大学教育学部　喫茶 Peepa

第10回

宮澤賢治を読む

語り手 … 長友恒人 [奈良教育大学 学長]

- 日　時：2011年2月14日（月）18：00〜20：00頃
- 会　場：奈良教育大学　学生食堂“なっきょん食堂”ホール

第11回　読書カフェのお知らせ

と　き ▶ **11月17日（木）午後6時より**

ところ ▶ **龍谷大学 大宮キャンパス東黌（とうこう）3階306**

語り手 ▶ **石塚武志　龍谷大学法学部講師**

タイトル ▶ **『水俣学講義〔第4集〕』**
原田正純・花田昌宣編著（日本評論社刊）

京都経済短期大学生協　理事長 小路真木子
（京都経済短期大学准教授）

森正久著『暗黒のシステムインテグレーション』アイ・ディ・ジー・ジャパン（①）
ロジャー・ゼラズニイ著『光の王』ハヤカワ文庫（②）

①連載開始時から10年以上が経ち、出てくる技術はすっかり古くなっている。が、人間は変わらない。おそらくどの時代でも、そしてどの職場でも、「いるんだよね、こういう人」「あるんだよな、こういう状況」と思えるような話ばかりである。だからこそ、分野を問わず、これから社会に出る学生たちに読んでほしい。バカバカしさに呆れ、理不尽に悪態をつきながら、それでも仕事をする、これが普通の社会人の姿なのだ。これを読んで笑っておけば、現実も乗り越えられる。かもしれない。

②文学としての質とエンターテインメント性を兼ね備えた、優れたSF。よくあるSF的設定を使っただけのファンタジーとは明らかに違う。深町真理子の翻訳も良い。

滋賀医科大学生協　理事長 礒野敬高（滋賀医科大学准教授）

野口悠紀雄著『「超」文章法』 中公新書

極めて論理的な文章の書き方が述べられています。英語の論文を書く時や、プレゼンをする時にも通じるノウハウがあります。とても参考になりました。「なりました」と過去形になっているのは、本書で指摘された禁則事項を忘れて過ちを犯すようになってきているからです。何回も読み直さす値打ちのある本です。

滋賀大学彦根地区生協　理事長 内藤雄志
（滋賀大学経済学部准教授）

苅谷剛彦著『知的複眼思考法』 講談社＋α文庫

物事を論理的に思考する技術を身に付けたいという方には参考になると思います。

奈良女子大学生協　理事長 大塚浩（奈良女子大学生活環境学部准教授）

山口進・宮地ゆう著『最高裁の暗闘 - 少数意見が時代を切り開く-』朝日新書

米国などに比べ保守的といわれている日本の最高裁だが、実は内部では、単純に保守的とわくをはめることのできない葛藤がくりひろげられている。時代に合わせた法のあり方を考えさせられる。

奈良工業高等専門学校生協　理事長 桐川修
（奈良工業高等専門学校教授）

鈴木孝夫 著：『ことばと文化』 岩波新書

「ことば」は単独で存在するわけではなく、それを用いる人々の生活、すなわち「文化」と切っても切れない関係にあります。身近な例を用いて私たちの常識をあらためて問い直すことで、外国語学習の大いなるヒントを与えてくれるでしょう。